

## Open-desk方式（普通教室の形態）によるLLの授業 — Hearingの向上をめざして—

杉下 莊介\*

この研究はAAC型24台とAA型24台という条件のもとで、一クラスを等質に2分してAAC群とAA群とに分け、同一教材を用いて授業を進めた場合、AAC群のHearingはAA型よりどの位、伸びるであろうかを考察した研究である。

授業では音読とFour Phase Drillの練習問題を教材とし、AAC群は自己ペースで学習し、AA群はマスターコンソールから流される教材に従って反応する方法がとられた。評価は一課終る毎に聞き取りテストを実施した。その結果から、両者の間に有意差は認められなかったが、AAC群が平均点と学習態度を総合的に見る限りすくなく、アンケートの結果からも学習意欲が強い事がわかった。

### I 研究主題設定の理由

1 今までのLL教室での授業は、普通教室で行なわれた授業のまとめと強化をLL教室で行なうのが一般的傾向であった。しかしLL教室の持つ設備上の制約、運営、教材等の面から次の様な反省がなされた。

- ① LLの機能を生かした方が学習効果が上がるものと、そうでないものを明確にした上で、普通授業の中にLLを生かした学習を毎時間、組みこんだ方がよい。
- ② 従来のdividerは防音効果が少なく、生徒同志・生徒対先生のふれあいも制限されるので、学習効果を高めるために改善した方がよい。
- ③ 一般的にLL学習は疲労度の点から、おおよそ15分が限界であると言われている。従って、週一回、LL教室に入って一時間中、学習するやり方では、あまり効果が期待できない。毎時間、普通授業の中に10～15分のLL学習が可能になる施設と授業展開がより効果が上がると考えられる。

この様な反省をふまえ、本校は学級数は10学級であり、現在の英語科の週時数からみても、ほぼ英語の時間はLL教室で可能である事を考慮に入れて、LL教室を設置した。これをOpen-desk方式と呼び

①各デスクのdividerを低くする。②マスターコンソールとブースの間の仕切りを設けない。③マスターコンソールのうしろに黒板を設け、普通授業の中にLL授業を行なうという授業形態をとれる様にした。(図1)

2 本校の生徒の実態はテストの結果等から、特にHearingの力が落ちこんでいる。そこでLLを効果的に利用してHearingの向上をはかりたいと考えた。ところで四技能はおのおの、独立しているのではなく、互いにかかわり合っている。たと



図1

えば Speaking は Hearing を前提とし、Writing は Reading によって、より豊かになるというふうには。また Reading によって養われたものが音声化されて表出される時、speaking の活動となる。従って①音読を主とした Reading ② Four Phase Drill による Reading と Writing などの学習活動をからめながら Hearing の向上を目指した。

## II 研究の仮説

生徒の Hearing の力は、同一教材を用いて、AAC 型と AA 型とを同時使用した場合、AAC 型の方が効果が上がり、意欲が出て英語の力がつくであろう。

## III 研究の内容

### AAC 群と AA 群の学習活動と評価

#### 1 音読

AAC 群は予め録音しておいた tape を自分で操作して自己ペースで音読練習する。自分の力に合わせて one section 毎に①単語の発音練習②基本文の読み③本文の重ね読み (read with the tape) ④本文の pause 入りの読みの順で練習する様に組んであるが、上位群は④で始まり④だけで終る場合もあり、反対に下位群は①だけで終るかも知れない。あくまでも各自の学習到達度によって異なる。一方 AA 群はマスターコンソールからの教材に repeat する。

#### 2 Four Phase Drill

one section 終る毎に 2～3 の代入・転換等の練習問題をやる。この場合 AAC 群は問題と答えを予め録音しておいた tape を自己ペースで練習する。AA 群は Reading の場合と同様、マスターコンソールから流される教材に従って答える。モニターは AA 群の方に比重を置き、回数を多くする。練習問題が終る毎に必要な指示を与える。

#### 3 評価

AAC 群・AA 群とも、普通授業で本文の one section が終る毎に、その section の内容についての英問英答を実施した。

以上の様に各 section 毎に 1～3 の学習を行ない、一課終る毎にその内容に類似した文を聞いて質問に答える多肢選択法のテストを実施した。AAC 群と AA 群の Hearing の伸びの差異を検討するものである。

以上の内容を図示したものが次の様になる。(図2)



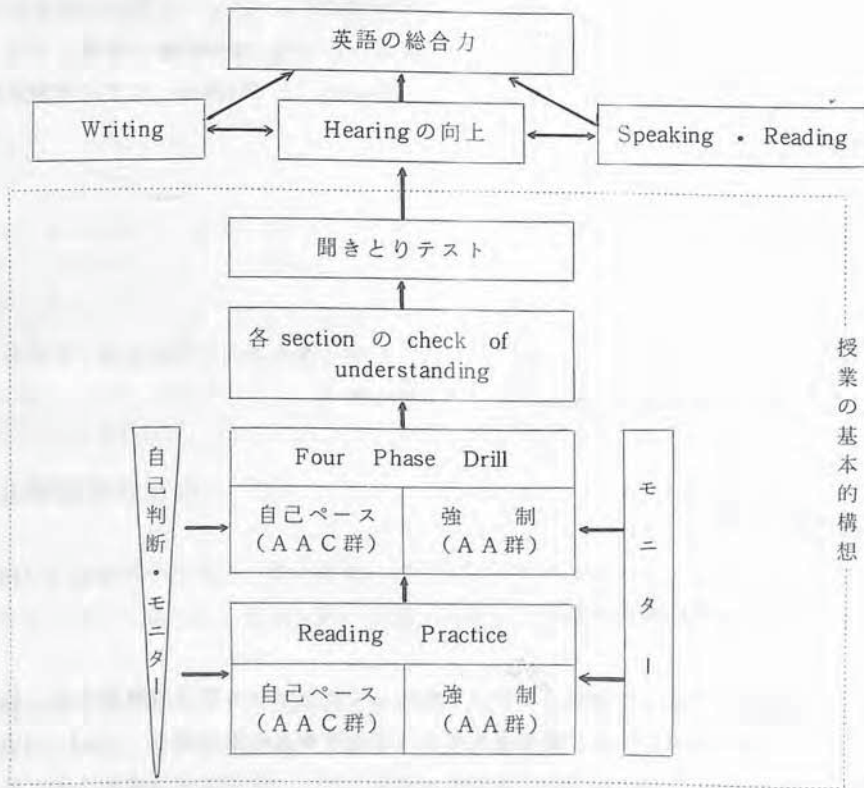


図 2

#### IV 研究の方法

##### 1 対象

本校の2学年（男62名，女62名，計124名）を各クラス毎にAAC群とAA群とに分けた。更に各群の上位群・中位群・下位群より各一名ずつ選び，抽出児とした。

##### 2 期間

4月～10月

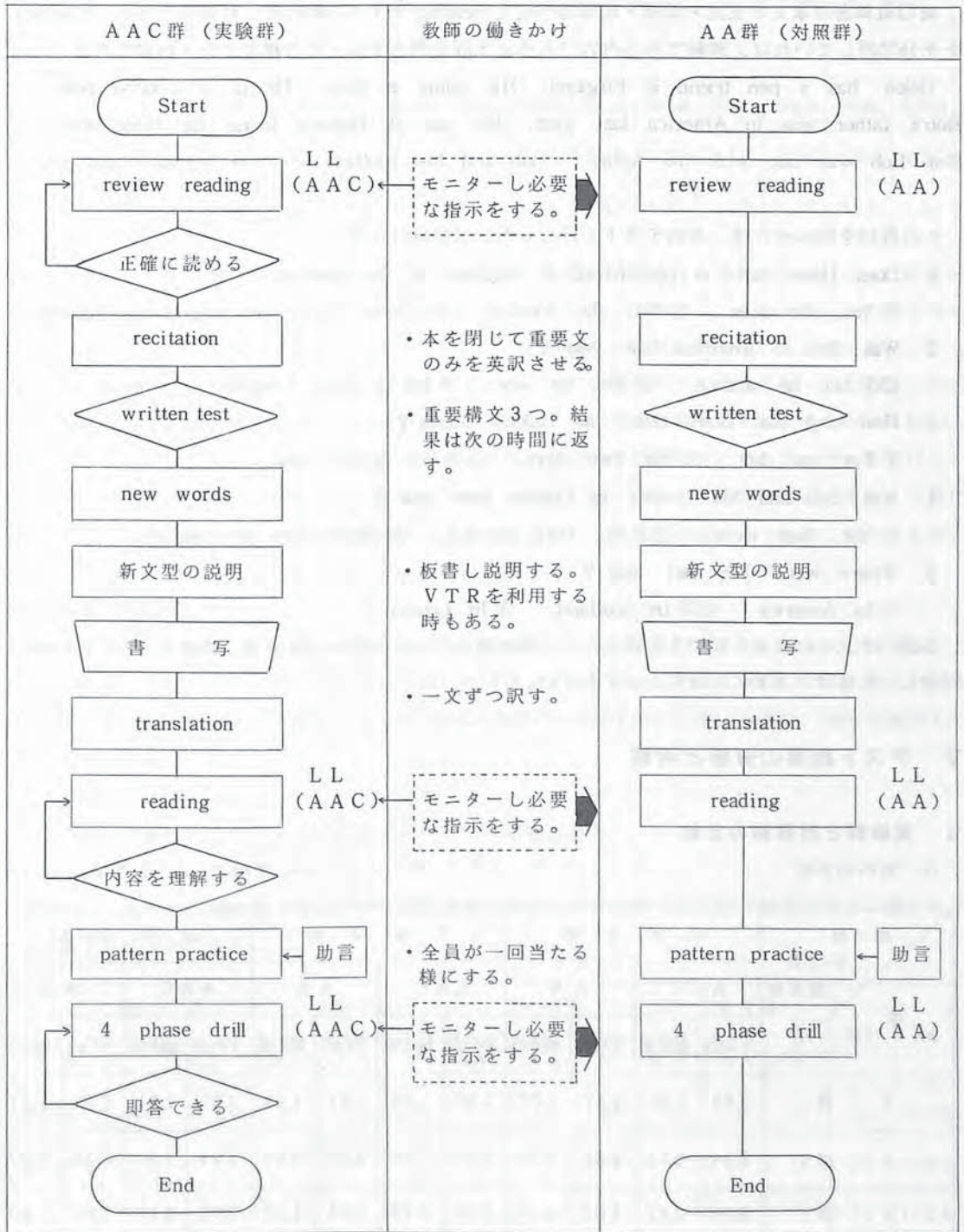
##### 3 AAC群とAA群の構成

校内で既に実施済の知能検査の結果と，一年時に行なった学期末のテスト等，合計8回の学力検査の結果を偏差値に換算し，各クラスを等質になる様にAAC群とAA群とに分けて構成した。

##### 4 使用教材

- (1) 読みの教材——教科書付随のLL版のtapeから生徒用に録音しなおす。one section 毎に，新出単語・文型・本文の通し読み・本文のpause入りの読み，の順で録音する。
- (2) 練習教材——代入・転換等の問題を含んだLL版の練習問題から生徒の学習に合わせて再編した練習問題をやる。それはFour Phase Drillで，各sectionに2～3個の問題で構成されている。

5 授業の流れ (AAC群とAA群の比較)





## 6 事後テストの内容

使用教科書の本文の主語・場所・時間等を変えHearingテストの教材としたものである。生徒は本文を充分学習していれば、理解できる内容である。3課を例とすると次の様なテスト内容である。

Helen has a pen friend in England. His name is Bob. He is in London now.  
Bob's father was in America last year. He was at Helen's house for three days.  
But Bob was not with his father. Bob and his mother were in Scotland last year.

この教材を聞かせた後、次のテストを行なった。（◎印は正答）

- Does Helen have a pen friend in England or in America ?  
① Yes, she does. ② No, she doesn't. ◎③ She has a pen friend in England.
- Was Bob in America last year ?  
◎① No, he wasn't. ② Yes, he was. ③ He was in America.
- How long was Bob's father at Helen's house ?  
① For one day. ② For two days. ◎③ For three days.
- Was Bob and his mother in London last year ?  
① Yes, they were. ◎② No, they weren't. ③ They were in London.
- Where were they last year ?  
① In America. ◎② In Scotland. ③ In London.

各課のテストは全部5問で5点満点とし、選択肢は三つの回答の中から選ぶ方法をとった。tapeは2回流し、生徒はテストにメモをとってもよい。

## V テスト結果の分析と考察

### 1 実験群と対照群の比較

#### (1) 資料の分析

組・群 平均点 偏差値 課	2 年 1 組				2 年 2 組				2 年 3 組			
	A A C		A A		A A C		A A		A A C		A A	
	平均点	偏差値	平均点	偏差値	平均点	偏差値	平均点	偏差値	平均点	偏差値	平均点	偏差値
3 課	2.94	1.30	2.47	1.22	3.00	1.56	2.81	1.15	3.00	1.01	2.79	1.34
4 課	3.54	1.13	3.21	1.04	3.61	1.36	3.60	0.99	2.91	1.32	3.13	1.02
5 課	2.66	1.42	2.62	1.14	2.95	1.12	2.95	1.20	2.75	1.16	2.80	1.05

組・群 平均点 偏差値 課	2年1組				2年2組				2年3組			
	AAC		AA		AAC		AA		AAC		AA	
	平均点	偏差値	平均点	偏差値	平均点	偏差値	平均点	偏差値	平均点	偏差値	平均点	偏差値
6 課	3.25	0.97	3.15	1.13	3.01	1.07	3.00	1.33	3.55	1.08	3.09	1.30
7 課	3.75	1.08	3.65	1.51	3.71	1.18	3.52	1.20	3.70	1.47	3.65	1.30

AAC群とAA群との平均の差の検定を行なった結果、有意差は認められなかったが上記の結果から考えられる事は、①平均点を全体として見る限りではAAC群の方がよい。これは自分の目標を決め自己ペースで、自由に練習し、到達度に合った学習をする事がこの様な結果となったと考えられる。また、休み時間から進んで学習しているのが見られた。この事も平均点の差に出て来た一因と考えられる。②中にはAA群がよい場合もある。その理由として、次のアンケートの結果からわかるとおり3組のAA群はむしろAAC型よりAA型の方が意欲が出ると答えた者が半数近くもいた。自己ペースではないがモニターされているための緊張感から集中度が高まり成績に結びついたと考えられる。また、等質に分けたのであるが、活気があり、教師の指示に従って学習して、成就感を味わう生徒が3組のAA群には多かった事も予期せぬ結果が出た一因であると思われる。

## (2) 抽出児の比較

抽出児を観察した結果、①成績はAAC群の方がAA群より上回る傾向にある。②AAC群では、上位群・中位群・下位群のいずれの抽出児も予測した通り、音読・Four Phase Drillの時、自己ペースで意欲的に取り組んでいた。下位群のある抽出児は、常にはわき見ばかりしているのに、tapeを操作して声を出してrepeatしていた。

(1)、(2)の分析を裏付けるものとして次のアンケートの結果がある。

## 2 LL学習についてのアンケート

〔質問1〕あなたは前の席(AAC型—録音出来る席)と後ろの席(AA型—録音出来ない席)とでは、どちらがよいですか。

組・群 項目	2年1組			2年2組			2年3組			総計	%
	AAC	AA	計	AAC	AA	計	AAC	AA	計		
前の席(AAC)がよい	20	16	36	18	15	33	15	6	21	90	72.0%
後ろの席(AA)がよい	0	3	3	0	2	2	6	10	16	21	16.8%
どちらでもよい	2	1	3	4	3	7	1	3	4	14	11.2%



前の席（AAC型）がよい理由として次の様なものがあった。（原文のまま）

- わからない所を自分のペースでなんどでも聞けるから。
- 自分で自由にテープが聞かれて、まちがった所をなおしたい時になおせるから。
- 好きなだけ練習できる。
- 一人でリピートでき、リラックスして出来るし、やる気が出て来る。

後ろの席（AA型）がよい理由としては。

- 前の席だと自分勝手にやるので気がゆるみ、ついなまけてしまう。後ろの席だと常に緊張していてまちがわない様に努力して、がんばろうという気持ちになるから。
- ヘッドホーンをつけた時、先生が聞いているのできちんとリピートするから。
- モニターされた時、できないとはずかしい。そのために勉強するから。

〔質問2〕 あなたは前の席（AAC型）と後ろの席（AA型）とではどちらが意欲が出てきますか。

組・群 項目	2年1組			2年2組			2年3組			総計	%
	AAC	AA	計	AAC	AA	計	AAC	AA	計		
前の席の方が意欲が出る	17	11	28	19	10	29	10	4	14	71	56.8%
後ろの席の方が意欲が出る	0	3	3	0	5	5	9	10	19	27	21.6%
どちらとも言えない	5	6	11	4	4	8	4	5	9	27	21.6%

〔質問3〕 あなたは読みの練習や、ワークシートを使った練習の時、疲れますか。

疲れると答えた者はAAC群15.3%、AA群28.3%、疲れないと答えた者はAAC群70%、AA群60%であった。この事は全体的に見ると、自己ペースとコンソールから次々に流される場合とでは、自己ペースで意欲を持って取り組んだAAC型の方がAA型に比べて疲労感が少ない事がわかる。

### 3 まとめ

この研究から明らかにされた事は、次のとおりである。

- ① AAC群とAA群とを比較した場合、有意差は認められなかったが、平均点・学習意欲でAAC群がすぐれている。
- ② AAC型で学習したいと希望する生徒が多い。AAC型で学習した生徒の成績は全体的によく、アンケートの結果から、AAC型の方が疲労感が少ないという事も、学習効果が上がった事を裏付けしている。
- ③ 生徒の中にはAA型はモニターされる回数が多いので緊張すると答えている者がいる。このことは、そうした緊張感が学力達成動機を強化し、意欲も高まり、その結果よい成績となった。3組のように、そういった雰囲気が支配してよい成績となる場合もある。こうした心理的要素も大きく左右する事がわかった。

## VI 反省と今後の課題

以上のような研究をして来たが、次の様な観点で反省し、今後の課題を考えたい。

### 1 授業過程のくふう

Hearing の向上をめざして、音読と Four Phase Drill を中心に授業を進めてきたが、この2方法のほかに Hearing の力を伸ばす方法を考えたい。

### 2 練習問題のくふう

市販の教科書付随の練習問題を使用したが生徒の学力差や四技能の相補的なからまりから考えてなお多様な学習を位置づけたLL用の教材の開発も考えなければならない。

### 3 テスト問題のくふう

簡単な聞きとりテストは、大まかな力を check する事が多いので、生徒の Hearing の力を詳細に分析できる、きめ細かい内容のテストも考える必要がある。

### 4 個別化の方向

AAC群とAA群に分けて実験してきたが、生徒一人ひとりの能力に合ったLLの授業を考え出し、個別化の方向へもって行きたい。そのためには、この研究からも明らかな様に自分の目標に合わせて学習でき、成就感を味わう事の出来るAAC型が個別化の方向に合致していると考えられる。